



僕と炬燵と画面の向こう側

学生記者 高石航平 (法学部4年)

箱根駅伝閉幕後、中央大学の藤原監督はこう語った。

「これが今の実力です。舟津はこの2年、普通ではない立場でよく頑張ってくれた。これからは少し自分のことにも集中してほしい。感じた弱さをバネに来年シード獲得を目指す」

監督の目は、すでに先を見据えていた。

第94回箱根駅伝が1月2日、3日にわたり行われた。2年ぶりに出場した中大は、1区に1年生から主将を務める舟津選手を起用。2区で9位、3～4区で8位にのぼり、往路をシード圏内の10位で走り抜けた。

しかし復路では順位を落とし15位。残念ながら今回はシード権を逃す結果となってしまった。

私は今大会で初めて箱根駅伝の

全区間をテレビ視聴した。胸を打たれたシーンがある。9区から10区をつなぐ鶴見中継所。中大の後ろにつけていた他大学の襷たすきが目前でつながらなかった。

大会記録を調べてみると、こうしたことはよくあるらしい。残り数分、数秒であっても繰り上げスタートのピストルは鳴り、アンカー達は代替え襷で走り始める。観客から落胆の声が漏れ、選手は泣き崩れていた。

選手たちに掛かる期待と責任の重さを感じた。大学の名誉と誇り、沿道に早朝から詰めかけた大勢のファンや家族らの熱心な応援。

チームからは監督の激励、陰で支えてくれたマネージャー、そして駅伝を走ることはできなかったが、今まで苦楽を共にしてきた仲間たちの

想いを各々のユニホームと襷にのせて走っている。

襷を1区から10区まで、つなぎきった中大。2年前に藤原監督が就任。チームに危機を感じ、思い切って当時の1年生に主将・副将を託した。その効果が出てきたように思われる。

特に舟津選手は、主将として部員らをまとめ上げつつも、選手としてよい結果を出さなければいけないという生半可ではない立場にいた。

初めての箱根路を経験したことで、全員の目標が明白になり、来年によりいっそうの期待が高まる。

恥づかしながら、毎年毎年寝正月だった私に、箱根駅伝は情熱と興奮をもたらせてくれた。新たな縁に感謝しつつ筆を置くこととする。



純白のユニホームを着て、1区を走る舟津選手